

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒190-0013
東京都立川市富士見町2-12-13 安藤ビルB1F
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up, TOHOKU!

2013年(平成25年)8月16日 金曜日

無料

第15号

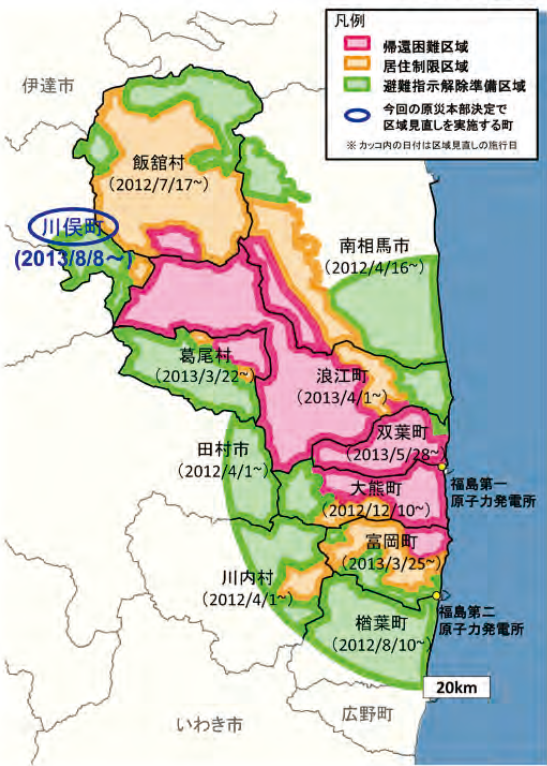
毎月発行

創刊2013年(平成25年)8月16日 金曜日

参考2

避難指示区域の概念図

平成25年8月7日現在



経済産業省作成

福島・南相馬レポート ①

雇用維持で奮闘する厨房メーカー『タニコー』 撤退企業が多発する中、避難指示解除後 1年をかけ工場を一新して再開した地元企業

念願の南相馬地区取材

筆者は以前から福島の被災地最前線、それも出来る限り福島第一原発の近くの地域への取材を実現しなくてはならないと思ってきた。そして被災から二年後の現地の状況、そこに暮らす人々がいまだに思いで過ぎていくのを知りたかった。しかし、現地入りの機会も案内役も見つからず、これまで実現しなかった。

今般、たまたま知人の紹介で、七月二八、二九日の両日、南相馬市に工場のある厨房メーカーの工場取材と、併せて同地区での開催の【相馬野馬追】取材も兼ねて、ようやく実現する運びとなった。この記事はその状況報告である。

南相馬地区の現況

東京から南相馬に行くルートは現在、東北新幹線で仙台まで行き、常磐線に乗り換えて南下、巨理駅で代行バスに乗り換え、約一時間ほど走り、相馬で再び常磐線に乗り、現在最終駅となっている原ノ町(原ノ町以南は未だに不通である)まで行き、そこで電車を降りて車で移動するのが最も早い。とはいえ仙台から戻る形なのでかなりの時間を覚悟しなければならぬ。福島から岩沼へ抜け、そこから常磐線に乗り換えるルートもあるが、このルートはさらに倍近く時間がかかる。原ノ町までの道程、代行バスに乗り換える以外、他の街と変わらないように見えた。線路脇にガレキが山積している風景もなく、町中にボランティアがあふれているわけでもなく、津波



タニコー(株)小高工場

による破壊の傷跡もよく分らないほどに整理されていた。しかし、この第一印象はあとで大きく覆されることとなる。

目には見えない放射能の状況は、経済産業省が作成した『避難指示区域の概念図』(平成二五年八月七日現在)を参照していただきたい。外見とは異なりこの地域一帯はいまでも大変な緊張状態にある。概念図のほぼ中央右に南相馬市という文字が見えるが、その文字の下の緑色で囲まれた部分(避難指示解除準備区域)から赤色部分の境界までが今回の取材目的地である。

タニコー(株)訪問

前述の企業とは、タニコー株式会社という厨房機器メーカーで、福島県内に、鹿島、原町、小高、小高第二、いわき各工場の五つの

工場を持つ。

五工場のうち、いわきを除く四工場が南相馬市にあるが、小高工場と小高第二工場の二工場が、昨年四月一六日、警戒区域指定を解除された地区にあり、うち小高工場がその後約一年をかけて工場再開準備をし、今年四月に稼働を開始した。

小高工場訪問に先立ち、鹿島工場の中野製造部長と鈴木次長をお訪ねして、現在の南相馬の状況についていろいろお聞きした。

報道減少と認識ギャップの拡大懸念

個別の地域情報を教えていただいた以上に印象に残ったのは、この地域が中央メディアでどう取り扱われている、それを受けて他地域に住む人々がどう感じて

いるのかについて意見交換をした場面である。

震災発生から二年四ヶ月を経過して、マスメディアによる報道機会がめっきり減少した。しかし、この地区の緊迫した状況は大した変化があるわけではない。むしろ、これから本格化する予定の除染に本気で期待できるのか、ここでの生活再建はほんとうに大丈夫なのか、それともやはり他地域への移住しかないのか、といった厳しい選択を前にして悩む住民の緊迫度はいや増していることだろう。

しかし、他地域に暮らす人々は、報道がなければ何となく事態が好転していると思いがち。そうして現地と他地域の認識ギャップがどんどん拡大していく。この傾向は、そこで復興を目指す現地の人々にとっては非常に重要な問題となる。

現地に行つて分かること



これ以上先は許可証が必要
福島第一原発から数キロ地点



小高のまちはゴーストタウン

正直に告白するが、筆者の、新聞やテレビなどの生半可な間接情報だけで組み上げたこの地区に関するイメージは、話をお聞きするうちに、ことごとく打ち砕かれた。当然ながら、緊迫感がまったく違うのだ。

やはり取材の鉄則は、現地に赴き、自分の目で見て、自分の耳で聞き、自分の体全体で感じるということだ。今回それを痛感した。言葉で表現しても伝わるのはごく一部であり、現地に赴き身体全体で受け止める情報量は圧倒的に多く、比較できない。そこでは「現実」が否応なく迫ってくる。

例えば、南相馬地区はおそらく日本で唯一、車載ナビが使えない地域である。近隣からこの地区にナビで来ようと思つても、ナビの指示通りに走ると放射線の検問等に引っかかって別の場所に連れて行かれ、同じようにナビに導かれた他の

多くの車の大渋滞に巻き込まれるということだ。ここでは紙の地図が最も有効である。こうしたことは現地に行かないと分からない。他にも似たようなことはたくさんあるだろう。そうしたひとつひとつがこの地域の「現実」を構成する。

3・11から日々の暮らし

前出の鈴木次長さんは、3・11から二年以上が経過したいまは日々放射線情報を細かくチェックすることはなくなつたとおっしゃっていたが、それはいまだかと言えないことであり、直後は想像もできないくらいに緊迫感があっただろう。またチェックしないのは関心が無いのではなく、大体の傾向が分つたということであり、他方、依然として政府発表、電力会社発表のデータへの信頼性については疑念が残るままである。それから、こちらからは



放置された家



空き地に放置されたガレキ



小高地区にあった有名なお菓子屋さんの垂れ幕

このまま6号線を行けるところまで行ってみるかと聞かれたので、間髪を入れず、当然行くと返答。ここで放射能リスクがあるからと引き返すわけには行かない。

小高工場訪問

次に、許可証なしで入れない双葉町入り口で引き返す、小高工場へ。工場にはいくつもの建物があり、そのうちの管理棟の両脇には、それぞれ長さ二〇メートルほどの大型の太陽電池が設置されている。また、かつては物流倉庫だったという工場棟は、最新鋭の設備を導入した製造ラインに変わった。これは「福島県産業復興企業立地助成金」を活用した結果であり、平成二五年四月に最新鋭の生産設備を有した工場に生まれ変わって再開、再開記念式も挙行了。

人のいない小高の街

小高工場からの帰り道、かつて多くの人が生活していた商店街を通っていった。いまはだれもいない。警戒中のパトカーが走るだけであり、ゴーストタウン状態のなか、誰に知らせるのか、空しく信号が作動していた。

人が住まなくなつてから、半野生化した犬、牛、豚、イノシシなどが急に道路に飛び出すので注意せよという看板である。警戒解除が昨年四月、3・11から約一年人が住まなくなつて、それらの動物の「天下」となった。イノシシも人の姿を見ても逃げない。むしろ人間が自分たちの縄張りに入

小高地区から 双葉町入り口まで

鹿島工場での取材の後、国道6号線に入り小高工場に向かった。小高工場に向かう途中、鈴木次長から、

あたりに店はないし、病院もないので暮らせない。

撤退企業続出の現状の中、雇用維持の企業あり

この地域一帯ではすでに、小さな子供を抱える親たちの多くは移住を決定したであろう。高齢者は元の居場所に戻りたがっている。一家の働き手は生きるための働き口が必要だ。かつてここにあった大企業は風評被害その他の事情でほとんど撤退した。雇用が消滅すれば、移住を決定しなければならなくなる。

また、除染は本当に有効なのか、除染後も本当にここに住んで大丈夫なのか、仮住まい状態はいつ解消しようかと悩ましいことだらけである。

震災から二年四ヶ月経過し、住民はそれぞれ置かれた状況が異なるなかで決断を迫られている。そうした状況のなかで働き口が維持されることは非常に重要である。すべての企業が撤退すれば、たとえ警戒区域が解除されても、人は減り続け、ゴーストタウン状態のままとなる。

そうしたなかでタニコーは雇用維持を掲げ、ひとり奮闘してきた。厨房機器はステンレスが主要材料なので、風評被害は小さかったとおっしゃるが、ここで雇用維持を掲げ続けるには勇気がいる。その勇気に心よ

街中から離れると、青いシートを被り放置された家々があちこちに点在する。そこに住もうとしても、

福島・南相馬レポート ② 【相馬野馬追】 力強く復興への意気を示す



お行列の騎馬武者



甲冑競馬

国の重要無形民俗文化財として相馬地方に千年以上も続くといわれる「相馬野馬追」。これは相馬氏の祖である平将門が、野に放していた野馬を捕らえる軍事訓練として、また捕らえた馬を神前に奉納したことにも由来する儀式である。

かつて小藩であった相馬藩はいつ他国から攻め込まれても対応できるよう日頃から学問も礼儀作法もしつ

けも怠らず、武士道精神が旺盛だった。この地はその伝統を千年以上に亘って受け継ぎ、野馬追の一連の儀式のなかで継承してきた。しかし震災では野馬追に参加する馬の多くも犠牲となり、甲冑等も津波で流され、破損もした。犠牲者もいた。とはいえ千年以上の伝統を大震災で途絶えさせるわけにはいかないと、野馬追復興にける意気込み

は並々ならぬものがあつた。大震災の年も昨年も完全復興はできなかったが、今年こそ実現しようという意気込みは、この地域の復興と表裏一体をなすことを強く感じさせた。



神旗争奪戦

二八日は、九時半から南相馬市原町区内での騎馬武者の「お行列」。震災後は参加する騎馬も激減したようだが、今年は四二九騎と震災前の九割に回復した。「中ノ郷」、「小高郷」、「標葉郷」、「北郷」、「宇多郷」の五つの郷が、神旗争奪戦

が行われる雲雀が原祭場を目指し順次「野馬追通り」を出発。途中で逐一先遣隊から各郷の大将に「状況報告」がなされる。完全に騎馬武者になりきっている。祭場での式典挙行の後、「甲冑競馬」開始。白鉢巻をしめ馬にまたがり、先祖伝来の旗差物をなびかせ風を切って疾走する。この甲冑競馬は一周千メートルを疾走。迫力満点。ただ今年



二子鬼剣舞

岩手・北上、花巻—郷土芸能の旅 もうひとつの東北の夏祭り —まつろわぬ古代蝦夷の心が蘇る— 第52回 北上・みちのく芸能まつり (8/3・4) 平成25年度 花巻市郷土芸能鑑賞会 (8/4)

「東北三大夏祭りを避け 北上と花巻の 芸能祭へ」

毎年八月のはじめ、東北各地は夏祭りでにぎわう。有名どころでは、青森のねぶた、仙台の七夕、秋田の竿灯の東北三大祭。これに山形の花笠踊りを加えて四大祭りとか、他にも岩手のさんさ踊りを加えて五大祭りとか、相馬野馬追を加えての五大祭りとか、さまざまな名称があるようだ。それらだけでなく、他にも東北各地には多くの祭りがあり、そして多くの観光用のくくり名称があり、とても数え切れない。

また、この期間中には、東北各地から、また他地域から、あるいは海外から大勢の観光客が東北に集結する。各地のひとつひとつの祭りごとの主催者公表の集客人数をざっと集計しても、軽く延べ一千万人を超える規模である。いやひとつとしたり二千万人に届くような規模かもしれない。

それだけこの短い期間に集中すれば、すべての祭りはおろか、三つや四つの祭りを見るだけでも大変な距離を移動しなくてはならないし、そのための労力と日数が必要となる。

よしんば複数の祭りをひとつで見ようとしても、駆け足状態は避けられない。ダイジェスト版の短縮された祭を見ることで我慢せざるをえず、間違いなく欲求不満状態に陥るだろう。したがって、残念ではあるが、毎年どの祭りか、あるいはどの地域か、ひとつだけを選択して観賞せざるを得ないこととなる。

祭ファンならば、ひとつどころである。身も心も二つ以上に分裂してしまいたい気持ちになる非常に悩ましい季節である。

筆者は今年、あえて三大祭りを避け、七月末には相馬野馬追を先行して見に出かけ、月が明けて八月三日、四日には「第52回 北上・みちのく芸能まつり」と「平成25年度花巻市郷土芸能鑑賞会」を選択した。

何せ初めて見るので、何がおすすめで、どこで何が演じられるのか不明のため、花巻在住の藤原さんと北上在住のまつもとさんと案内をお願いして参加することとした。とにかくワクワク感でいっぱいだった。

なプログラムを見て驚いたのは、とにかく北上とその近隣の郷土芸能だけでなく、主として岩手県内の多くの郷土芸能が参加していること。そして郷土芸能のジャンルのあまりの多さ。有名な北上の「鬼剣舞」は地元の諸団体だけでなく、全国にある保存会が一同に会し、海外団体も参加していた。また大人だけでなく、幼稚園児の団体も複数ある。これがさまざまな会場で踊る。とにかく数え切れないほどの団体数が集結した。

シシ踊り(*記載が保存会ごとに異なるため、あえてこの字を当てる)も県内各地から多くの保存会が参加した。四日夕刻のシシ踊り舞は圧巻だった。



中野七頭舞



金津流石関獅子躍



権現舞群舞入場



煤孫ひな子剣舞



錦町虎舞



村崎野岳神楽 権現舞



鬼剣舞保存会勢ぞろい



早池峰しし踊り



門中組虎舞

そして、祭りに詳しい案内人がいなければ、ものすごい群衆のなかに埋もれるばかりで、何が何だかわからないうちに祭りが終わってしまうだろう。結局、見たい郷土芸能の演目を一年で見るとしても無理で、何年もかけて制覇するのを覚悟しなければならぬ。

いくつかの

貴重な出会い

そうしたなかで、貴重な出会いもあった。まずは筆者の生まれ故郷の宮城県涌谷町にある簗峯寺という古いお寺と縁の深い「村崎野大乘神楽」の舞い手の方とお会いできたこと。十数年前に、この舞い手の方は、簗峯寺に公演に行ったことがあるとのことだった。すばらしい舞い手であり、足捌き、体捌きなど見とれて

しまうほど見事だった。

シシ踊の魅力に取り付かれて入門を果たした若い女性にもめぐり合った。女性でありながら目指すのは「女鹿(めじし)」ではないそうだ。定期的に保存会の練習に参加するため、遠路駆けつけているそうだ。県内の有名なシシ踊団体の中立(なかだち:リーダー)の舞を間近で見ることができたことも大きな収穫であった。シシ踊の仲間内では知らない人はいないほど有名な人である。

こうした出会いも、二人の案内人がいなければ実現しなかった。感謝したい。

花巻市

郷土芸能鑑賞会

八月四日は花巻に移動。花巻市文化会館で「花巻市郷土芸能鑑賞会」を行った。



おにやなぎ保育園鬼剣舞

九つの出演団体のうち、五つが神楽。シシ踊、念仏剣舞、虎舞、さんさ踊りが各一団体ずつ。

花巻に伝わる神楽は山岳信仰に基づく修験者集団によってもたらされた山伏神楽が主流で、南部神楽とは随分趣を異にして、宗教色が濃い。

虎舞は、津波被害が甚大だった大船渡から有名な「門中組虎舞」が参加。ダイナミックな舞を披露して、観衆から激励を伴う拍手喝さいを浴びていた。四時に見終わってから花巻市内を散策。ちょうど、最後の神楽団体の「胡四王神楽」の「胡四王神社」に行った。この神社は蘇民際という奇祭でも有名だが、創建は大同二年(八〇七年)、坂上田村麻呂と伝承されている。

前述の筆者の故郷の簗峯

東北の郷土芸能は「祭」とは別ジャンルとすべし

以前から、東北の郷土芸能を「祭」と呼ぶと、他地域に誤解を与えたと考えてきた。別な呼び方がふさわしいと思う。なぜなら、多くの郷土芸能は「先祖供養」と深い関係があり、またどれも「神事」と位置づけられ、娯楽性とか観光用イベント臭は感じられず、とても宗教色が強いと感じられるからである。しかも、仏

教だ、神道だ、何とか宗派だとかいうことではなく、そうした線引きを超えた宗教感覚ともいべきものに貫かれていて感じるからである。

寺と創建も同じ、田村麻呂創建も同じ、たまたまいも同じ、立地条件、古い杉木立も、見晴らしも似ている。偶然とは思えない一致だが、この大同二年という年は東北にとつて屈辱的な年に起きた事ともいえず、詳しく調べてみたい。



販売機もシシ

この二日間のミニ旅でいろいろなことを考えた。行きの新幹線で読んだのが、『炎立つ』や『火怨』などの歴史小説で有名な高橋克彦氏の『東北・蝦夷の魂』だったからかもしれない。でもそれだけではない。

この両市の郷土芸能まつりを見て、そのエネルギーに圧倒されたのが原因であろう。東北人はおとなしいとか我慢強いとかよく言われるが、筆者はそうは思わない。内にたぎる思いが、こうした郷土芸能に一挙に託され、演者と観衆が一体になって、思いを共有する。

気分は最高に高揚し、魂は高ぶり、打ち震え、荒ぶる。そして人間界をはるかに超えた世界をのぞき見せる。そんな気分を味わった。かつて「まつろわぬ人々」であった古代蝦夷の心が内に蘇る錯覚を覚えた。

こうした思いを引き出してくれた両市の郷土芸能に感謝したい。そしてこのエネルギーがぜひ一刻も早い「東北復興」につながって欲しいと願う。

郷土芸能のエネルギーを東北復活の起点に!



飛勢太鼓



小瀬川神楽 三番叟



村崎野大乘神楽



土沢神楽



胡四王神楽

胡四王神社案内
御祭神 大己貴命(おおのむねのみこと) 少彦名命(すくなひこのみこと)
御由緒
大同二年(八〇七)坂上田村麻呂東征の折、この地に宿宮し、得兵の武運長久、無事原野祈禱のため、自ら兜の中心に納めてあった護符(護符)を祀り創建された。開基時代には医王山胡四王寺(天台宗)として寺十八ヶ寺を数える全盛時代を成した。天文年間(火災に遭い一時荒廃したが)南無に引継がれてからは社務を受け、祭礼には代参を遣わすなど、南無の祈願所として地域の信仰を集めて来た。文化十五年(一八〇四)別当杉山丹後守原道春が神道記官となつてから、薬師如来を、医王の神・開基の神である「大己貴命」「少彦名命」に代え、村名を以て天沢神社とした。明治六年(一八七三)に、町合併で市制が施行された昭和十九年(一九四四)胡四王神社と改称し今日に至る。

胡四王神社由来

気仙沼に見る 震災復興の現状と今後

復興商店街の活気と 今後への不安

震災発生から二年五ヶ月が経った。復興に向けた取り組みは依然その途上にあるが、各地で着実にその歩みは続いている。

先日、震災後初めて、宮城県気仙沼市を訪れる機会があった。震災発生時、気仙沼市は大津波とその後発生した大火事に見舞われ、死者・行方不明者は二二八〇人、被災世帯数は九五〇〇世帯に上った。現在でも四六二五世帯が仮設住宅あるいはみなし仮設での生活を余儀なくされている。



解体が決まった第18共徳丸

市魚市場の水揚げ状況は、震災のあった平成二三年が前年の平成二二年の27・12%の数量に落ち込んだものの、昨年は55・67%にまで回復してきている。今年

はさらなる回復が見込まれている。漁船の復旧率も昨年十一月末現在で51・3%、養殖施設の復旧率も45・1%、潮位にかかわらず陸揚げが可能な漁港数も昨年一二月末現在で50・0%と震災前の半分までには回復してきていることが分かる。

執筆者紹介

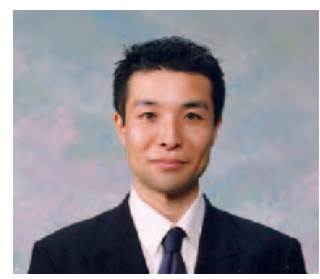
大友浩平

(おおもともこうへい)

奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。

「東北プロダク」
http://blog.livedoor.jp/anagmash/

Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo



流された。そうした壊滅的な被害からの復興を目指す人達による復興商店街は現在市内に一二を数える。

このうち、昨年十一月にできた「復興屋台村気仙沼横丁」には二一店舗が入居し、市内では「気仙沼復興商店街南町紫市場(五四店舗)」、「気仙沼鹿折復興マルシェ」(二五店舗)に次ぐ規模を有している。「屋台村」の名の通り、ここは他の復興商店街と違って飲食店がメインで、しかもその内容も実に多岐にわたっている。ラーメン、ま

ぐる料理、郷土料理、中国料理、焼き鳥、居酒屋、シヨットバー、立ち飲み、手打ちうどん、韓国料理、カフェダイニングなどのお店が軒を連ねている。港のすぐそばに位置することもあって他にも鮮魚店やかに専門店、八百屋、海産物店もあり、お昼時や夕方は地元の人や観光客でかなり賑わっていた。

ついているお店の人から聞いたところ、大きな問題があるのだという。その問題というのは、この「復興屋台村気仙沼横丁」、なんと今年十一月までの期間限定で、その後は取り壊されるのだそうである。せっかく人が集まる場所ができて、お店の人も復興に向けて懸命の歩みを進めているところだといふのに、なぜそのよう

なことになるのかと聞いてみると、この「復興屋台村気仙沼横丁」のある土地は気仙沼市が私有地を借り上げ、それを二年の期限で無償で出店者に貸与したものだからとのことである。なぜ二年かと言うと、敷地内の建物が中小企業基盤整備機構の仮設施設整備事業を活用して建設されたからで、この制度を活用する際の条件として二年間の期限が設定されているから、という話であった。

十一月で終了した後、今ある土地には市の復興計画に従って高さ10mの防潮堤ができるのである。その一方、多くの入店者は十一月以降、他の場所での営業の目処が今のところ立っていないらしく、廃業するお店も相当数あるのではないかともしう。こうした話を聞いて、一体何のための復興かという思いを抱かずにはいられなかった。

第18共徳丸保存問題 と震災遺構

気仙沼と言えば、津波によって打ち上げられた大きな船の映像を目にした人も多いだろう。この船、第18共徳丸を「震災遺構」として保存する意向を、菅原茂市長は従前から表明していた。しかし、八月五日に気仙沼市はその保存を断念することを公表した。

第18共徳丸の船主は当初市の意向を汲んで、船を市に無償で貸与する契約を結んでいた。しかし、市民の間から保存に反対する声が出た。船主は多く寄せられたことから船を解体することを決定した。それに対して市が翻意を促すというやり取りがこれまで続いていた。

気仙沼市は津波避難等に関するアンケート調査を実施していたが、その中でこの第18共徳丸の保存に関する市民の意向を問うていた。その結果が公表された。菅原市長の思惑は、このアンケートで保存を望む市民の数が多いいことを船主側に示し、それによって解体にストップを掛けようというものだった。ところが、今回のアンケートで「保存が

望ましい」と答えた市民はわずか16・2%、「船体の一部や代替物で保存」の15・5%と合わせても、保存に賛成する声は31・7%にしかならなかった。これに対して「保存の必要はない」という回答は68・3%と圧倒的で、残念ながら市長の思惑通りにはならず、これを受けて保存の断念を表明したという経緯であった。

震災遺構については以前第6号で取り上げた。その中では、「残すと判断するのは、今すぐでなくてもいい。ただ、将来の可能性のために、震災遺構となりうる対象の早期撤去については、しばしば留保してほしい」と述べた。今回の気仙沼市の決定はその意味で大変残念であったが、そこに住む市民の多数の意向がそうなのであれば、それはやむを得ないことである。船主は新聞社の取材に対して「船の存在が気仙沼市民の間に溝を作り、争いの種となることは避けたい」として、その理由を説明している。

その気持ちも分かる。保存反対が多数だったアンケート結果について市は、①震災の記憶を甦らせる大きな遺構が町の中心にあることへの違和感、②また、そのことによる周囲の周辺住民に対する気遣い、③遺構保存のための整備費に対する国の対応が不透明な実態とその後の運営費に対する危惧、④震災からの復



多くの人が訪れている
【復興屋台村 気仙沼横丁】



簡易な店舗が軒を連ねるが、それが特有のアウトホームさを醸し出している

興、特に住まいの再建や産業の再生を優先すべきとの考え、⑤船主が既に解体を表明している事実、⑥市の遺構保存に関する住民説明が未だ不十分であり浸透していない実態、などを挙げた。⑤を除けばこれは多くの震災遺構に共通の問題と言える。

菅原市長は記者会見で、「これはあくまで共徳丸についての結果。他の市町村や関係者は、遺構の保存をためらわないで欲しい」と述べている。村井嘉浩知事も「市の判断として尊重したいが、非常にシンボリックな物なので、遺構として後世に残す価値はあった」と述べている。今回の第18共徳丸の保存断念をきっかけに、再度震災遺構についての議論が活発になればよいと思う。

防潮堤をどうするか

震災復興を巡る問題でもう一つ大きな問題は、防潮堤をどうするかである。今回の震災で防潮堤は、未曾有の大津波から住民を守ることはできなかつたように見える。「万里の長城」と言われた宮古市田老地区の高さ10mの二重の防潮堤はその一部が津波で破壊、破壊されなかつたところでも津波は防潮堤を乗り越えて内側の集落を襲った。釜石市の湾口防潮堤は水深63mから立ち上がる「世界最大水深の防潮堤」としてギネスブックにも載っているが、震災でその大半が決壊し、大きな被害をもたらした。その一方で、普代村は高さ15・5mの普代水門と太田名部防潮堤が壊れることなく津波の勢いを削ぎ、被害を最小限に食い止めた。これら防潮堤の効果については、防潮堤が津波を一時的に食い止めて避難の時

間をかせいだという意見がある一方、防潮堤を越えた津波が流れを速めて威力を増したという意見もあり、評価は定まっていいるとは言えない。大きな防潮堤があると海が見えないことから、また防潮堤があるという安心感からかえって避難が遅れたという意見もある。こうした意見を踏まえて、今後どうしていくかを考えるのがまさに復興の肝だと思われるのであるが、こと防潮堤に関しては、どうもそうした検証を置き去りにしたまま性急にことが進んでいるように見える。こうした国主導で進む防潮堤の建設計画に対して、気仙沼市では市民が「防潮堤を勉強する会」を立ち上げて勉強会を重ねてきた。紙幅も尽きたので、この防潮堤の問題は次回改めて取り上げてみたい。

連載
むかしばなし

芭蕉のむかしばなし

第三話
語り部の娘



奥羽越後氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出演し演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当。

車窓の娘・若に手を振り、出発した後も、佐々木喜善は南の方角を気にしながら歩いていった。

「佐々木さん、戦場の方も心配しておいでですか。」
「そう、賢治の方を振り向いて、喜善は応える。」
「昨夜、大勢が亡くなる夢を見まして。東京の震災の時より近いし、戦のせいも霊力も強烈です。」

「私は、東照宮のお山から、もう車両へ引き返します。」
「そういう喜善に、賢治が頷く。」
「そうですか。お嬢さん、大切にしてくださいね。大した娘さんです。」
「そう思われますか。」
「初め、妹が目の前に現れたかと疑いました。似ているというより、同じ物を心で持っているといえますか。・妹は六年前に他界致しました。」
「そうでしたか。」

「東照宮へ行く途中だからな。小田原遊郭といえども、三十軒に迫る奥州一の花街よ。」
坊主、行く気か。そんな金、あるのかよ。何人かの男が、からかう。悪気はないはずだが、少年は鷹のよう

うな目で睨みつけた。
不穏な空気を感じ取ったか、今純三がさりげなく割つて入る。
「祝魚君よ、マタギなんて、鉄砲などぶち放つ剛の者でなくては勤まらんのだろう。」
それを聞いて男達が驚いて顔を見合わせる。
「俺家は訳あって、鉄砲を持たんし、弓は禁じられてる。だから槍とか、いろいろの罫を使う。」
「槍だつて！その方がよほど豪胆だな、たまげた。」
そこへ、宮澤賢治までがひよっこり入る。
「君、食糧調達は程々に、早めに汽車のところへ戻って、あのお嬢さんを守ってやっておくれ。」
「はあ。しかし頼りになる者は残ってるんじや。」
「どうも胸騒ぎがするね。」
賢治が独り言のように呟く。
*
やがて、次第に晴れていく霧の向こうに小高い丘が見え、その手前に低い崖の下に落ち込む小さな川の流

四谷用水が掘られて、初めて仙臺の町が生まれることになるのですね。」
「そう言ったのは、喜善だった。そうなのですか、と賢治が訊く。」
「広瀬川は深い崖の下にあるので、もともと仙臺は水を運び込めない、町作りにも不適地なのです。そこで伊達の殿様が水路を縦横に通して、人々の生活用水としました。」
「ふん、お詳しいな。さあ、この川は歩いて渡れますぞ。」
芭蕉がそう言って、崖の岩場を素早く降りていく。
「北六番丁に、ごでんのさんという河童さんがおられるという事で、調べるうちに知った事なのです。」
「なるほど、さすがは遠野の喜善さんですね。」
賢治が心底感嘆したように言った。
「いえ、仙臺に引越すならどこがいいかと探している次第です。」
ここで食糧調達班と分か

霧が去り、気温が上がってきた。車両に残った乗客の何人かが、窓を開け放つ事に足らず昇降梯子を外へ降り立ち、散歩など始めて

いる。残った者の中には、未だ今の状況に納得できず憤っている人々がおり、何事か言い合っている。こんな馬鹿げた事が現実になるはずがない、何か仕掛けがあるのだ、これは博覧会の大掛かりな催しなのだ、等々。そう言えば、「博覧会がもう終わってしまった」と芭蕉が言ったのを若は思い出した。確かに、博覧会が何か関わっているの

も知らない。一体、どういう事なのだろうか。
しかし、それより若が気になって仕方ないのが、東のすぐそこに見える丘に陣を張っているという、奥州藤原氏四代・泰衡の事だ。遠野、花巻から仙臺に來るには必ず平泉を通るが、藤原氏とはこの平泉を拠点に今の東北全体を一つの国のように支配した一族、謂わば東北の王である。

若は背骨の病で学校に通えなくなってしまったが、学のある父のお陰で日本東北の歴史の要所である平泉はよく知っている。つい五、六〇年前の戊辰戦争、徳川の時代の飢饉の悲惨さ、今も東北中の村々を苦しめる貧しさも含め、世の中は酷い事だらけだった。その全ての始まりと考えると、若は源頼朝よりも、藤原の四代目・泰衡に対して怒りと憎悪を覚えるのだった。

その泰衡が、あの丘の上にあつたか、父の語って聞かせる話には幾度も彼らの影が垣間見えたものだ。藤原氏三代・秀衡は源頼朝と対立し追われた天才武将である弟・義経を奥州へ迎入れて、頼朝との大戦への切り札と目論んだが、その息子泰衡は頼朝を怖れて義経を死に追い込ませた。しかし結局攻め込まれ、一つの国としての東北

は潰されてしまったのだ。この衝撃的な地元の歴史を、若は初めて仙臺へ向かう汽車に乗り、平泉を通過する時に、父から聞いて知ったのだ。
父は言った。一つの国だった東北がどんな所だったか、昭和の今誰一人知る事はできないが、おそらくその時を堺に、何かがつまみ変わった事になった。今の東北は、ひどい暮らしをしている人が多いが、その始まりは、その時からだった。
*
女性悲鳴が外で響いて、若の思考は寸断された。客車内がどよめいて、皆東側の車窓に身を乗り出す。かなり車両を離れて散歩していたらしい、町娘風の洋装の女がこちらへ必死に駆けつけてくるのだが、その背後の樹の陰から馬に乗った武者が突如出現したので、皆驚いて窓から一気に入退いた。しかも騎馬武者の姿は一つではなく、横一列にほとんど等間隔で十数騎、視界いっぱい広がって、歩を進めてくるのだ。散歩に出ている人々は慌てふためき、車両に向かつて走り出したが、悲鳴を發した女は転倒して草陰に見えなくなった。
水の節約の事もあり、火が完全に止まっていた機関車では、機関士がホイッスルを吹くとしたが、主任機関士が押し留めた。この時代には留めずの音を立てば「地元民」を無闇に刺激し、また出発

した仲間らを徒に動揺させてしまう。
武者は皆簡素な兜を被り、何人かは弓を手にして、矢を弦にかけている。一人が馬を降りて、転倒した女を助け起こすのが見えた。
速度を早めた一騎が異様な黒い鉄の塊に近づき、見上げ見回す。そして呟いた。「二体、これは何なのだ。」
東北訛りである。運転室の窓から、恐る恐る主任が顔を出す。
「機関車で、ござるよ。」
若のいる車窓から、武者と二言三言交わして機関車を降りていく主任と、そこへ歩いていく車掌の姿が見えた。一方、洋装の女は馬を降りた武者の手助けを受け、無事客車に戻ってきた。どうやら、無闇に攻撃を加える意思はないようだ。(もう頼朝の軍が来たのかわ)

「いや、平泉の、蝦夷の兵だろ。」
「蝦夷って、アイヌ人だろう？ どう見ても日本人じゃないか。」
乗客がひそひそと言いつている。こちらも馬を降りた先程の武者としばし話した主任と車掌が、客車に乗り込んで言うには、武者らは藤原泰衡の兵であり、主任が車掌が代表者として泰衡の元へ赴き、釈明する事を求められたらしい。客車内に驚きが広がったが、機関士、車掌いずれも車両を離れる訳にはいかぬ、そこで誰か講釈の上手い、人望のある人材は残っていないかと、全ての車内を探し始めた。
若は自分の心臓がやけに激しく高鳴っているのに気づいた。何故？と思ひながら、何故かは解っていた。心の中に、芭蕉の話聞きながら、客車を降りていった、好奇心に満ちた父の姿が映る。しかし若は、解いてもいた。そのような大胆な事が、自分にできるのか、と。
車掌達が、かなり高輪の洋装紳士と、和装で肥つた商人風の男の二人を連れて、最後尾の車両から降りてきた。どうやら、彼らを代表として泰衡の元へ送り込むと決めたようだ。若は何かか背を押されるように客車を降り、彼らの前に立った。
「私も、同行させて下さいまし。」
若は凛として、そう言い放つていった。
「何を言う。君のようなおぼこを。」
「私は、佐々木喜善の娘です。」
止めかけた車掌のみならず、残る男達も一瞬、たじろいだ。
「物語を聞いては語り、また聞いたら語り伝えていく。それが語り部の務めです。行かねば、父に叱られます。」
次回答告

「次回答告」
泰衡に正面した若は、本当に怒りの一言をぶつけてしまふのか？そして、芭蕉が持つていた意外な物とは？

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

シリーズ 遠野の自然
「遠野の花々」②
遠野 1000 景より



ニコウキスゲ



カマツカ(ウシコロシ)

ニコウキスゲ：ユリ科の多年草。ゼンテイカ(禅庭花)ともいうようだ。それにしても鮮やかな花の色だ。禅に打ち込めず心が乱れるかもしれない。
カマツカ(ウシコロシ)：材が堅くて折れにくいので、ハンマーの柄にされたり、また鎌

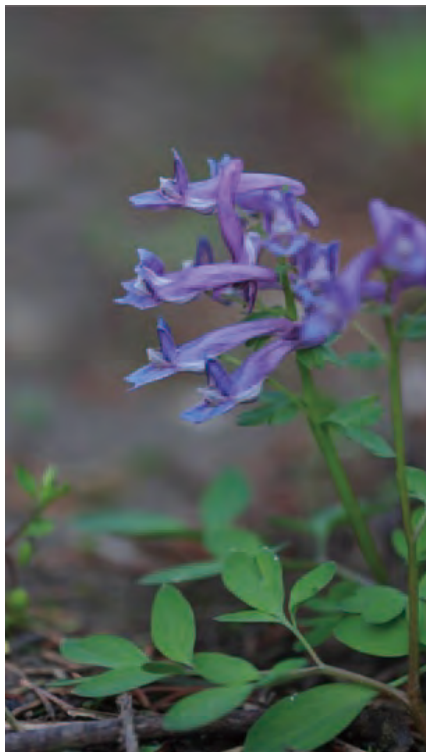
今回は「遠野の花々②」として、前回に続き遠野の花々を取り上げる。前回と比較的名前をよく知られている花々を紹介したが、今回は一般にはあまり耳にしたことがないような花々をご紹介します。それにしても遠野の多様な植物類については何といふべきであろう。ひとつひとつの花々も貴重だが、多くの花々で形成される植物多様性という世界はもっと貴重である。

いま世界で生物の多様性が叫ばれている。生物とは動物だけでなく、植物もある。しかしどうも動物絶滅リスクへのアピールが多いように感じる。その証拠に、反捕鯨活動は活発だが、植物の絶滅リスクへのアピールは比較にならないくらい少なく、パワー不足である。植物は動物に比べてその数も多い。地上で繁栄に成功した生物である。だから安心していいのだろうか。写真の花々は絶滅危惧植物に指定されたものもある。有名になると乱獲リスクも発生する。十二分に留意すべきである。

の柄になるからカマツカ(鎌柄)の名があるようだ。また、別名ウシコロシと物騒な名前も持つが、牛の鼻に綱を通すとき、孔をあけるのに使われたり、また鼻環にされるためのようだ。バラ科。
ヤマシャクヤク：ボタン科ボタン属の多年草。環境省のレッドリストの準絶滅危惧(NT)に指定されている。
コバイケイソウ：ユリ科の多年草。小梅蕙草と書く。名前の由来は、花が梅に似ており、葉が蕙蘭に似ているためとのこと。

エビネ：海老根と書き、ラン科の多年草。これも環境省のレッドリストの準絶滅危惧(NT)指定。
エンゴサク：延胡索と書く。ケマンソウ科ケマン属に分類される多年生。塊茎は生薬である。
マムシグサ：蝮草。サトイモ科の多年草。秋に結実したマムシグサの先端は、「まむし」ならぬ、まるでガラガラ蛇である。名前も形状もおどろおどろしい。
ミヤマオダマキ：キンポウゲ科オダマキ属の多年草。岩手県で絶滅危惧II類に指定されている。高山植物。
ミヤマヨメナ：深山嫁菜。キク科の多年草。ミヤコウスレ、アズマギクといわれて園芸店で売られるのは、本種の栽培品種とのこと。
オキナグサ：翁草。キンポウゲ科の多年草。結実の際、柱頭が羽毛状に成長し白髪状となり、名はこれに由来する。

の柄になるからカマツカ(鎌柄)の名があるようだ。また、別名ウシコロシと物騒な名前も持つが、牛の鼻に綱を通すとき、孔をあけるのに使われたり、また鼻環にされるためのようだ。バラ科。
ヤマシャクヤク：ボタン科ボタン属の多年草。環境省のレッドリストの準絶滅危惧(NT)に指定されている。
コバイケイソウ：ユリ科の多年草。小梅蕙草と書く。名前の由来は、花が梅に似ており、葉が蕙蘭に似ているためとのこと。



エンゴサク



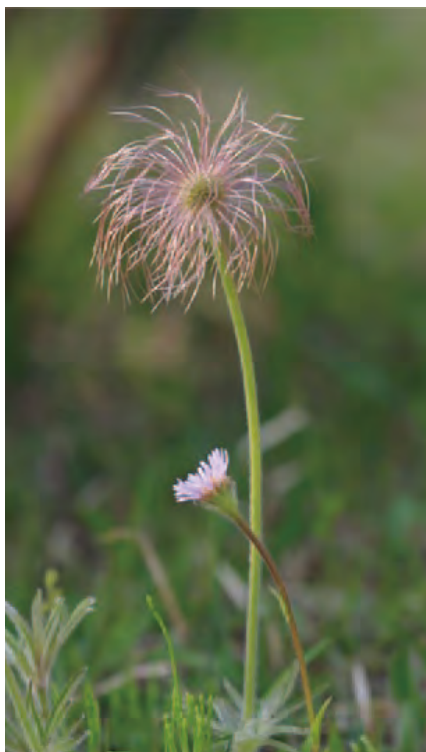
エビネ



コバイケイソウ



ヤマシャクヤク



オキナグサ



ミヤマヨメナ



ミヤマオダマキ



マムシグサ

東北地ビール紀行

その② 青森県編

何とお寺で地ビール醸造 地ビールならぬ「寺(じ)ビール」 by 大友浩平

全国唯一? お寺が つくる地ビール

青森県内には以前、青森市、八戸市、弘前市と、主だった都市にそれぞれ地ビールの醸造所があって、地元特産のリンゴを使ったビールを作ったり、地元の名水で仕込んだりと工夫を凝らした取り組みをしていたが、現在ではいずれも醸造



崇徳寺境内にある「卍麦雫」(まじむぎしづく)の自動販売機

を止めてしまっている。現在醸造を行っているのは二箇所である。

まず、何と言ってもユニークなのは、「卍麦雫(まじむぎしづく)」という名前のビールを作っている、下北半島にある本州最北端の町、大間町のバイコードリンクB・S(青森県下北郡大間町奥戸93、TEL 0175-373342、http://www.1.ocn.ne.jp/~mk2)である。この地ビール、本州最北端の地ビールであるが、それだけでなく、もう一つ大きな特徴がある。実はこの「卍麦雫」、お寺でつくっている地ビールなのである。大間町にある浄土宗の寺院、梅香山崇徳寺、ここが「醸造所」のある場所である。ちなみに、「崇徳寺」は「すとくじ」ではなく「しゅうとくじ」と読む。「梅香山」は「ばいこうざん」である。そう、醸造所を運営する「バイコードリンク」というのは、「崇徳寺」の山号から取られた

名前なのである。

醸造を手掛けるのは佐々木真萌さん、崇徳寺の住職である。崇徳寺の境内には古くから湧ることなく湧き出ている天然水があり、地元では「長生きの水」として親しまれていた。元々ビール好きだった佐々木さんはこの名水を使ってビールを作ろうと考え、発泡酒免許を取得して醸造を始めたのだそうである。

それにしても、お寺にはよく「葎酒山門に入るを許さず」という札が掲げており、お酒はお寺の中に持ち込んではいけないことになっているのではないかと、思ったが、持ち込んだわけではない、中で作っているのだからよいのかもしれない(笑)。それに、ベルギーやオランダには修道院が作っているビール、トラピスト・ビールの例もある。「卍麦雫」はその日本版とも言えるかもしれない。東北以外の地ビールの情報には必ずしも明らわい

ではないが、崇徳寺以外のお寺で地ビールを作っているという話は寡聞にして聞かない。恐らく、全国で唯一の「お寺がつくる地ビール」、いわば「寺(じ)ビール」なのではないかと思う。これまたユニークなのは、崇徳寺の境内には写真の通り、この「卍麦雫」の自動販売機まで設置されているのである(写真撮影:宮里涼子氏)

奥入瀬の源流水で つくる地ビール、 そして津軽は

青森にはもう一つ地ビール醸造所がある。有名な奥入瀬渓流の源流水で仕込んだ地ビール「奥入瀬ビール」を醸造している十和田湖ふるさと活性化公社(十和田市大字奥瀬字堰道39-1、TEL 0176-723201、http://www.oirase.or.jp/beer/berhtm)である。日本の地ビール醸造所はドイツのビールをお手本にしたところが多いが、ここはチェコに学んだそうである。ちなみに、チェコが「ビール大国」であることはあまり知られていないが、チェコは現在世界で最も多く飲まれている、日本の大手メーカーも手掛けているピルスナーというスタイルのビールを生み出した国である。

「奥入瀬ビール」はそのピルスナーに、ダークラガー、ハーフ&ハーフ、ヴァイツェンの四種類がある。醸造所のある「地ビールレストラン 奥入瀬麦酒館」では出来立ての奥入瀬ビールを、地元の銘柄豚「地養豚」とんかつや奥入瀬ビールで煮たスベアリブ、ご

き、山の芋を使ったコロッコや青森にんにくの丸揚げ、奥入瀬ビールで漬けたおしんこなど地元食材を使った料理と一緒に味わえる。また、これら地ビールが二一〇〇円で二時間飲み放題にできるのも醸造所直結ならではの楽しみ。ちなみに毎月第三木曜日は「麦酒館の日」として、この飲み放題が男性一五〇〇円、女性は一〇〇〇円で楽しめる。なお、十和田湖畔のホテル等でもこの奥入瀬ビールを置いてあるところもある。下北地域、南部地域にはこのように地ビールがあるが、津軽地域については地元で醸造しているところが残念ながら今はない。ただ、大鰐町にある「そうま屋米酒店」(南津軽郡大鰐町大鰐湯野川原109-7、TEL 0172-483034、http://www.applet1181.jp/furusatobin/soumayya)では、地元の阿闍羅(あじやら)山からの伏流水を使った地ビールを、宮城県内で「松島ビール」を醸造しているサンケーヘルズに委託して醸造してもらって販売している。こうしてできた「津軽路ビール」は、大鰐町内のいくつかの旅館や飲食店で飲めるが、最近では青森市内で置く店も出てきている。個別の店名などについては、拙ブログを参照していただきたい(http://blog.livedoor.jp/anagnas/archives/cat_50030756.html)。(大友浩平)

**さらに積極果敢に
行動する新聞へ**
電子タブロイド新聞【東北復興】の
今後の方針

- ① 「三陸酒海鮮会」拡大
- ② 三陸水産業の復興支援策検討中
- ③ 東北復興から再興へ拡大

新聞発行をベースの 支援活動をさらに充実

今回で当新聞も第15号となった。よくここまでたどり着いたと思う。その新聞発行だけでも四苦八苦なのに、新聞をベースにして、現実に東北復興を前進させるのに効果的な支援活動も展開しようとしてきた。その活動は、進捗度合いはいろいろだが五項目ほどある。とはいえ、何もかも当新聞単独でできるものではない。協力者が必要で、これまでさまざまな形でコラボの呼びかけを行ってきた。しかし、最近のニュースをみると支援活動はほとんど下火になってきている。いくつかの復興支援NPOは、大震災から二年を過ぎて撤退あるいは規模縮小を決定したようだし、飲食で支援する複数の活動も最近撤退した。実に残念である。

なりつつある復興支援活動の再活性化を促し、継続的な支援活動を本格化させようという当新聞にとっても、支援活動の仲間やパートナー候補が減少するのを見聞きするのはつらい。

三陸酒海鮮会の拡大

前記の五つの支援活動中、被災地食材と酒で支援する「三陸酒海鮮会」は、渋谷にある焚火家さんで、ほぼ二ヶ月に一度のペースで実施中である。このイベントは今後も継続する。しかし、この一店舗だけで復興支援と呼ぶには規模が小さく、前からの協力店を探していたが、このほど日本橋に支援に協力的な小料理屋さんと岩手県盛岡市にも協力者ができた。双方とも今秋にもスタート予定である。

今後はさらに協力店舗を発掘して、三陸の水産業関係者に実質的な効果を実感してもらえ、規模にまで拡大していきたいと考えている。また、現在、「三陸酒海鮮会」以外の復興支援プログラムも開発中で、多くの関係先と打合せ中である。

非慈善型の復興支援へ

これら支援プログラムは、大震災直後に開始された「慈善型」ではなく、被災地の豊富な水産物を、他の非被災地と同条件で競争する形のものである。当然、価格も市場価格にリンクする。「競争」することが前提であり、負ければ消費は望めない。また、協力者にも消費者にも余分な負担をかけない形のもので、継続性が最大の主眼である。これでも三陸産は負けないし、魅力十分だと思える。

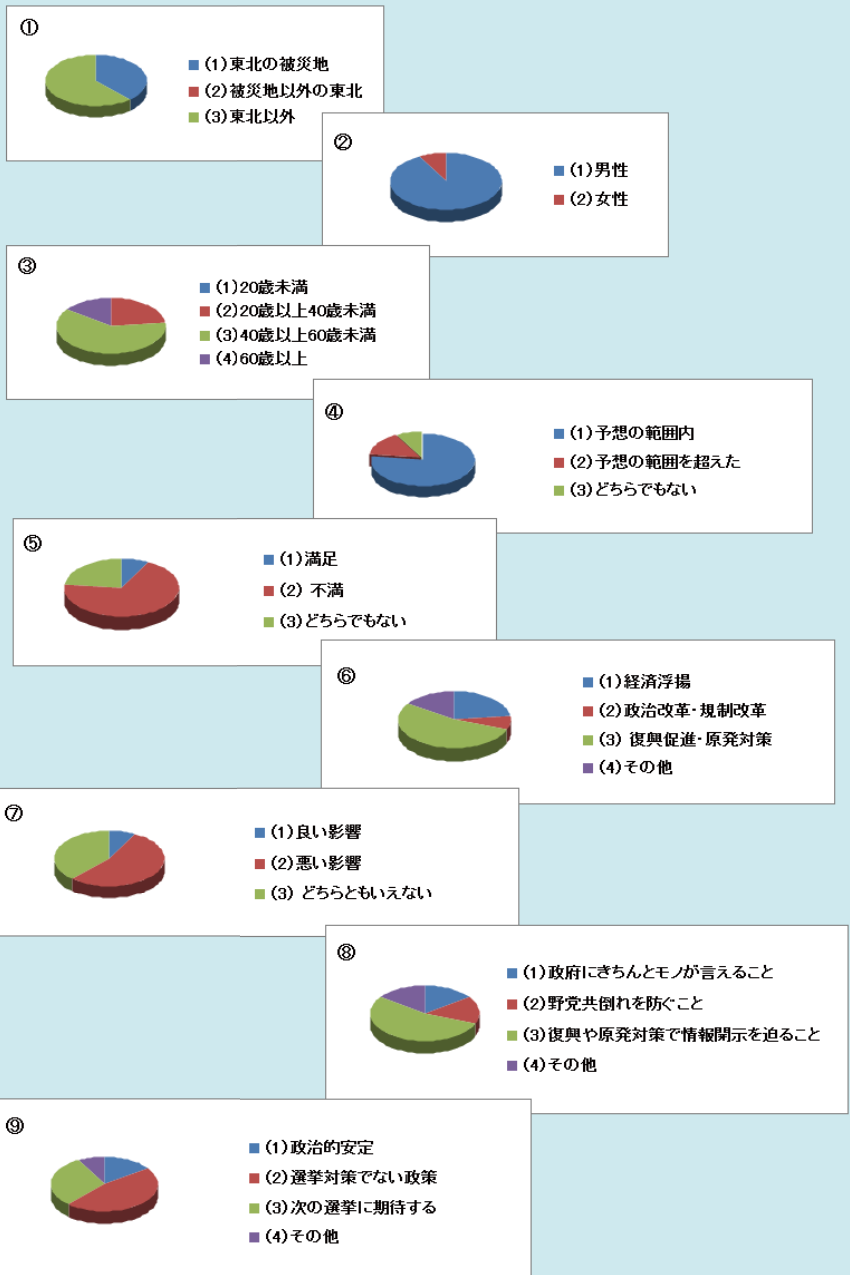
「東北復興」から 「東北再興」へ

もうひとつは、東北の復興運動をより大きな運動にまで拡大しようということである。これは、目先の復興だけではなく、大震災前からあった根本的な問題の解決までを指し、震災以前よりももっと活性化された東北を目指す運動である。いわば「東北再興運動」である。

いまこのような大胆な目標を掲げようとしている。内部で考えても外に宣言しなければ外からは「無」であり、「無」から「有」は出ない。大それた希望であっても発信しなければ「有」は産み出せない。そういう心構えで今後望みたい。

第14号 ネットアンケート集計結果 参議院選挙結果について考える

No.	質問と選択肢	回答数
①	住所	
	(1) 東北の被災地	5
	(2) 被災地以外の東北	0
	(3) 東北以外	8
②	性別	
	(1) 男性	12
	(2) 女性	1
③	年齢	
	(1) 20歳未満	0
	(2) 20歳以上40歳未満	3
	(3) 40歳以上60歳未満	8
	(4) 60歳以上	2
④	選挙結果は予想通り?	
	(1) 予想の範囲内	10
	(2) 予想の範囲を超えた	2
	(3) どちらでもない	1
⑤	選挙結果には満足?	
	(1) 満足	1
	(2) 不満	9
	(3) どちらでもない	3
⑥	結果を受けて政府に望むこと	
	(1) 経済浮揚	3
	(2) 政治改革・規制改革	1
	(3) 復興促進・原発対策	7
	(4) その他	2
⑦	結果は東北復興にどんな影響?	
	(1) 良い影響	1
	(2) 悪い影響	7
	(3) どちらともいえない	5
⑧	野党に望むこと	
	(1) 政府にきちんとモノが言えること	2
	(2) 野党共倒れを防ぐこと	2
	(3) 復興や原発対策で情報開示を迫ること	7
	(4) その他	2
⑨	今後の政治に望むこと	
	(1) 政治的安定	2
	(2) 選挙対策でない政策	6
	(3) 次の選挙に期待する	4
	(4) その他	1



今回の回答者数は一三名となりましたが、圧倒的に男性が多く、女性は一名のみでした。テーマは「参議院選挙結果について考える」でした。選挙日が七月二一日でしたので、新聞発行の一日から五日目でのアンケートスタートをお願いする形となりました。「選挙結果は予想通りだったか、予想外だったか?」については、約76・9%が予想の範囲内と回答。文字通り「予想通り」の回答となりました。「選挙結果には満足か? 不満か?」については、逆に、約69・2%が不満。「選挙結果を受けて政府に望むこと」は、多少意見が割れましたが、「復興促進・原発対策」が過半数の約53・8%となりました。「選挙結果は東北復興にどんな影響をもたらすか?」については、悪い影響との回答が約53・8%、どちらともいえないが約38・5%。「野党に望むこと」は何か?」については、「復興や原発対策で情報開示を迫ること」が約53・8%、他の三つの回答は同数で2票ずつ。「今後の政治に望むこと」は何か?」については、選挙対策でない政策が約46・2%、次の選挙に期待するが約30・8%となりました。結果は予想していたが、不満であること、不甲斐ない野党には復興や原発対策で情報開示を迫って欲しいとの「期待」が込められた結果となりました。

編集後記

今月号の東北取材は、七月末と八月はじめの二週連続で、休みなしで疲れしました。装備もカメラ三台で、荷物総重量は約二五キロ。七月は、金曜日の会社勤務を終えてから、電車を乗り継ぎ仙台へ行き、即打ち合せ。その後会食。翌日は、亡き母の四回忌と墓掃除、久しぶりの「東北を何とかする会」への参加。その翌日は福島での相馬野馬追取材、最終日が南相馬のタニコーさんという厨房施設メーカー行きと盛りだくさんでした。移動中は読書。八月は、北上と花巻行き。郷土芸能漬けの二日間でした。土曜日の六時には電車に乗って出発し、日曜の帰りは一二時に家に到着し、翌日は会社勤務のため五時半起きという強行軍。花巻では昼食中に大きな地震に遭遇するというおまけつきです。移動中はまた読書。こうした強行軍の取材は肉体的にこたえますが、結局のところは行って良かったという結論に落ち着く。サラリーマン勤務をしながらの新聞発行とそのため取材では、こうした状況は覚悟の上です。でもこれだけで満足できない筆者は、別の数本の企画も実行しようとしています。しかしそろそろ単独では限界です。協力者たちといっしょに活動するしかありませんので、たぐいまる募集活動中です。

革物屋 (かわもんや) WEB完全リニューアル (WEBを移動しました)

<http://www.birthday-press.com/> (バースデイプレス) → 「小物のカテゴリー」 → 「レザー」

<p>ミニバッグ Handy Second</p>  <p>持っていたくなる革バッグ。インナーバッグとしてもお使いいただけるセカンドバッグ。革は薄めの柔らかなものを使用し、手触り感を重視いたしました。内側は耐久性のある光沢ナイロン製布を使用。</p>	<p>ミニバッグ Tiny Dice</p>  <p>用途ご自由の四角いケース。重量40gと比較的軽量の製品ですので、携帯ストラップ用としてお使いいただくもよし、大きなバッグに吊り下げていただくもよし。また、中に贈り物をつめてプレゼントケースとしてのご利用も一考かと。使い方は工夫次第。</p>	<p>ミニバッグ Tiny Log</p>  <p>用途ご自由のまるいケース。重量40gと比較的軽量の製品ですので、携帯ストラップ用としてお使いいただくもよし、大きなバッグに吊り下げていただくもよし。また、中に贈り物をつめてプレゼントケースとしてのご利用も一考かと。使い方は工夫次第。</p>
<p>モバイルバッグ Beans L</p>  <p>レザーでオールマイティ、両方のご満足。これまで、オールレザーでお手頃価格のモバイル端末用バッグは多くありませんでした。また、各モバイル端末専用バッグはありましたが、どの端末でも収納可能なオールマイティバッグも多くはなかったようです。Beans Lは、その両方でご満足いただけるバッグです。</p>	<p>モバイルバッグ Beans S</p>  <p>レザーでオールマイティ、両方のご満足。これまで、オールレザーでお手頃価格のモバイル端末用バッグは多くありませんでした。また、各モバイル端末専用バッグはありましたが、どの端末でも収納可能なオールマイティバッグも多くはなかったようです。Beans Sは、その両方でご満足いただけるバッグです。</p>	<p>モバイルバッグ Handy Pouch</p>  <p>あなたにお供するポーチ。持ち運び可能で、デスクやテーブルに置いて開け閉めできるポーチ。上下蓋部分の内側にスポンジを挟み込んでおりますので、モバイル端末機器の付属品の収納にもお使いいただけます。</p>